

森鷗外の漢語

一 「舞姫」の漢語「坎坷」と「轆轤」の語義について

何 欣 泰

一 はじめに

『国語学大辞典』¹⁾によれば、

「漢語」 中国で外国語に対し自国語のことをこう呼んだが、日本では、狭義には中国起源の語で主として呉音・漢音で唱えるものを指し、広義には「和語」「外来語」に対して字音語をこう呼んでいる。(後略)

と説明されている。

本稿では、広義的な見方に従う。

漢語は中国から借用した語だと見られている。随って漢語の語義は多かれ少なかれ中国語からの影響を受けていると思う。しかし、漢語の語義は中国語を比較の対象として、日本語との意味の異同の研究に関する先行文献はけっして多くないから、まだ研究の余地はあると思う。

さて、日本人が漢語の語義について、どれぐらい中国語を理解して受容したか、どれぐらい新しい意味を付与したかは極めて困難な問題である。漢学の素養に培われた明治の知識人にさえ、日中両国の漢語のさまざまな語義のずれを確実に把握するのは非常に難しかったと言えるだろう。五歳にして漢籍の素読を始め、卓抜な漢学知識を持っていた鷗外は漢語の語義をどう受け取ったのだろうか。本稿では、「舞姫」で用いた「坎坷」(かんか)と轆轤(かんか)の二つの漢語から、これを考察する。

二 漢語語義の分類方法

鷗外の漢語を見る前に、一般的に漢語をどう取り扱うかについて述べたい。その関わりとして、用例はできるだけ岩波版の鷗外全集を利用する。

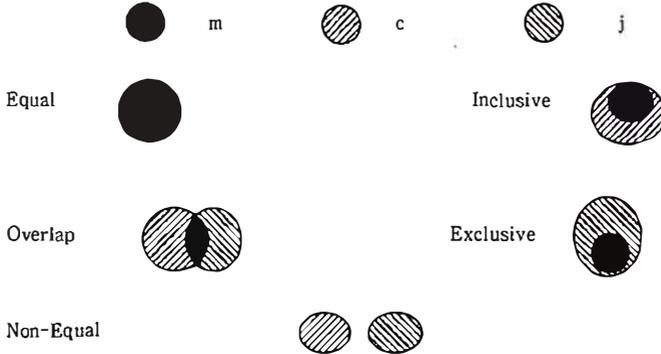
漢語について、一語一語をみてゆくと、複雑多様であるが、漢語の形、音、義の面で分類することができる。特に、語義については中国語から大きな影響を受けていると言える。ここでは、漢語の語義を次のように示す。

- ・中国語と日本漢語に共通する語義を (The Mutual meaning) m とする。
- ・中国語に固有の語義から m を除いて (The Chinese meaning except the Mutual mean-

ing) c とする。

・日本漢語に固有の語義から m を除いて (The Japanese meaning except the Mutual meaning) j とする。

すると、日中同形語 (日本漢語と中国語) は以下の五種類のカテゴリーに分類できる。²



A種類 Equal : m のみを含んでおり、j と c を含んでいない語彙。

B種類 Inclusive : m と c を含んでいるが、j を含んでいない語彙。

C種類 Overlap : m, c, j を含む語彙。

D種類 Exclusive : m と j を含んでいるが、c を含んでいない語彙。

E種類 Non-Equal : c と j を含んでいるが、m を含んでいない語彙。

以上の五種類はいずれも漢籍類にあり、日本における用例も認められるものである。

また、漢籍類に典拠を有するが、日本における使用の明らかでないものはF種類とする。

日本における使用は認められるが、漢籍類における典拠を明らかにし得ないものはG種類で、和製漢語はこの種類に属す。最後に、漢籍類にもないし、日本における使用の明らかでないものをH種類とする。小説家自身の造語はこの種類に属す。

ここまでの分類を整理すると、表一のように1から13までの語義の種類が分けられる。

表一 漢語の語義分類表

種類 \ 語義	A	B	C	D	E	F	G	H
m	1	2	4	7	/	/	/	/
c	/	3	5	/	9	11	/	/
j	/	/	6	8	10	/	12	/
その他	/	/	/	/	/	/	/	13

各種類の例を挙げる。(イ・ロ・ハ…は日本漢語の語義、甲・乙・丙…は中国語の語義)

A種類 例：懐旧

「舞姫」 (前略) 限なき懐旧の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。

日本漢語も中国語も「昔のことを思い出し懐かしむこと。」という一つの意味だけであり、この語義は第1類に属する。※<舞姫>「壁に應ずる響の如く、限なき懐舊の情を喚起こして」※<膠承志・致蔣経国先生信>「人到高年、愈加懷舊。」(人は年を取れば取るほど舊事を偲ぶ。)

B種類 例：老人

「舞姫」 (前略) この戟り開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を偷みて足を休むる商人などと臂を並べ、(後略)

イ・甲 年老いた人。年寄り。※<続日本紀・文武元年八月庚辰>「高年老人加恤焉」この語義は第2類に属する。日本漢語はこの語義だけがある。

乙 他人に対して自分の父母を言う言葉。※<老舎・婆婆話>「可是再說硬話實在使老人難堪；只好告訴母親；不久即有好消息。」(しかし、もっと硬い話をすれば、両親に苦しい立場に立たせるだけである。母親に間もなくいいニュースがあると言うほかはない。) この語義は第3類に属する。

丙 目上の人。

丁 年長者の自称。

戊 星の名。南極星のこと。「老人星」の略。

C種類 例：天気

「キタ・セクスアリス」 二月頃に久しく天気が続いた。毎日学課が済むと、埴生と運動場へ出て遊ぶ。

「天気」の語義は下記のようなのである。

イ・甲 気象の状態。※<三国・魏曹丕・燕歌行>「秋風蕭瑟天氣涼、草木搖落露為霜」(秋風が蕭瑟で[ものさびしいさま]、天気が涼しくて、草木が揺れ落ちて、露が霜になった) この語義は第4類に属する。

乙 時候。ある時刻。※<水滸伝・第八回>「兩個公人帶了林冲出店、却是五更天氣」(二人の役人は林冲を連れて店を出た。その時は五更(午前三時～五時)の時刻だった) この語義は第5類に属する。

ロ 空が晴れていること。天候のよいこと。晴天。はれ。この語義は第6類に属する。

D種類 例：景物

「舞姫」 (前略) 速く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる

中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多の景物目隄の間に聚まりたれば、始めてここに来しものの応接に遅なきも宣なり。

「景物」の語義は下記のようなのである。

- イ・甲 四季折々の情趣のある事物。自然の風物。景色。風景。光景。※連理秘抄「時節の景物を案じ得たる許（ばかり）にて、下手はよく付けたりと思ふべし」※《白氏長慶集》「江樓晚眺、景物鮮奇」（江辺にある高樓で晩景を眺めると、景色は鮮やかで美しく見える）この語義は第7類に属する。中国語はこの語義だけがある。
- ロ 主なものに添えて与えるもの。売出しなどに、売物に添えて客に贈る物。また、開店などのおりに客に配る贈り物。景品。※《怪化百物語〈高島藍泉〉下》「近所の茶屋の店びらきの景物に出したるうちはを手にさげ」この語義は第8類に属する。

E種類 例：四国

- 甲 四方の国々。天下の各国。※《蘇軾・石鼓歌》「皆云皇帝巡四国、烹滅強暴救黔首」（皆云ふ皇帝四国を巡り、強暴を烹滅して黔首（人民）を救へり）この語義は第9類に属する。
- イ 日本の四国地方。この語義は第10類に属する。

F種類 例：于婦

- 「伊澤蘭軒」 棠軒の女長が于婦の事、（後略）
- 甲 嫁にゆくこと。この語義は第11類に属する。

G種類 例：還暦

- イ 数え年六十一歳の異称。この語義は第12類に属する。

H種類 例：獸苑

- 「舞姫」 或る日の夕暮なりしが、余は獸苑を漫步して、（後略）
- イ 動物園。この語義は第13類に属する。

三 坎坷（かんか）と鞦韆（かんか）の語義について

さて、こうした分類を基調として、鷗外の漢語を考察してみよう。

○表街の人道にてこそ沙をも蒔け、錘をも押へ、クロステル街のあたりは凸凹坎坷の處は見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。（「舞姫」昭和十一年第一次岩波版『鷗外全集 著作篇』第二卷）

○彼は生路は概ね平滑なりしに、鞦韆数奇なるは我身の上なりければなり。（「舞姫」

昭和十一年第一次岩波版『鷗外全集 著作篇』第二巻)

まず、『古事類苑』『雅言彙覧』『俚言彙覧』には「坎珂」と「轆軻」という語は載っていない。『日葡辞書』(1603年)にも載っていない。『和英語林集成』の初版と三版にも載っていない。『文明本節用集』には、「坎珂 志不得時、不遇、義也」と載っている。『漢英對照いろは辞典』(高橋五郎著1888年)には「かんか(名)坎珂、失望 きおち disappointment」と載っている。

山田美妙の『日本大辞書』(明治25年)には、

- かんか 「坎珂=轆軻」かん(轆)ト同義。—「かんか不遇」。
 - かん(轆) 漢語。ツネニ「軻」ト熟語ニナツテ用キル。思フママン物ゴトガ行カズ、世ノ中ト自分ノ望ミトアチコチニナルコト。=グレハマ。=坎珂。
 - かん(坎) 漢語。前ト同ジ語。用キ方モ前ト同ジク「珂」ト熟語ニナツテノミ用キル。—「かん珂」。
 - ぐればま (前略) スベテ、物事ガ齟齬シテ適當セヌ場合ニ用キル。
- と載っている。

『ことばの泉』(落合直文 明治33年)には「かんか 坎軻。志を得ぬこと。絶望。轆軻。」と載っている。

『ことばの泉・補遺』(明治41年)には

かんか^名坎珂。不遇。ふしあはせ。「かんか、不遇 轆軻。」と載っている。

『修訂 大日本國語辞典』(仁田萬年、松井簡治著・昭和3年・富山房)には「かんか 轆軻・坎珂・坎軻 志を得ざること。世に不遇なること。困窮すること。」と載っている。

『廣辞林』(初版・大正14年・金澤庄三郎編・三省堂)には

かんか【轆軻・坎珂】(名) 志を得ざること。世に容れられざること。おちぶれたること。[—不遇]

と載っている。

これらの解釈によれば、日本語には坎珂と轆軻の使い分けははっきりしていないと言える。それでは、鷗外はどうして「坎珂」と「轆軻」を書き分けたのであろうか。

それは坎珂と轆軻の本義が違うからではあるまいか。これを考えるには漢語の造語の原点に戻る必要がある。まず、「坎」「珂」「轆」「軻」を一字一字で見よう。

・「坎」は会意兼形声字で、土十欠(音)である。音符の欠は、口をあけるの意味である。地面に口を開けている、落とし穴の意味を表す。周易の八卦の一つで、☵☵の形で窪みを表す。それを組み合わせた ☵☵ (坎下坎上) は困難な落とし穴の重なる意を示

す。

・「珂」は会意兼形声字で、土+可（音）である。《説文解字・土部》：「珂、坎珂也。」意味は土が平かでないである。

・「轆」は形声字で、車+惑（音）である。常に「軻」と熟語になって用いる。

・「軻」は形声字で、車+可（音）である。《説文解字・車部》：「軻、接軸車也。」「軻」の本義は車軸が途中で繫いである危ない車の意である。また、孟子が自分の不遇を痛感して、「軻」という名を付けたのは有名な話である。

さて、「坎珂」の本義は「土が平かでない意」である。この語義としては※《漢書・楊雄傳・河東賦》「淮南巢之坎珂兮、易幽岐之夷平」³（南巢の地の平らかならざるをにくみ、幽・岐の平らかなるをたのしむ。）（顔師古の注がある：「坎珂、不平貌。」）の典拠が挙げられる。現代の例は下記のようなものである。※《石震・踏察記事》「走在這上面、就像半夜摸黑走在坎珂不平的道路（平かでない道）上一樣、深一脚淺一脚、走一步一身冷汗。」また、「坎珂」は転じて、「不遇・志を得ない意」を表せる。※《聊齋志異・卷十一・陳雲棲》「移坐就榻，告愆坎珂，詞旨悲惻。」⁴（陳雲棲は寝台のそばに寄ってきて、不幸な身の上を打ち明けた。その話は悲痛を極めていた。）の例がある。また、「感恩の心⁵」という歌の中で「我看遍這人間坎珂辛苦」（私は人間の坎珂と辛苦を見通した）という歌詞がある。最近の例を挙げれば、1998年7月号の台湾の「遠見」雜誌（P、26）には、「這一世紀的中國女子、心靈之路尤其坎珂。（この一世紀の中国の女子は心靈の路が尤も坎珂である。）」という例が挙げられる。

「軻軻」の本義は「道が平かでない意」である。転じて、「車がゆきなやむ意」である。更に、「不遇・志を得ない」意味にも繫がられる。※《滑・劉漢葵・捉人行》「吁嗟小民亦何辜、水陸一時遭軻軻。」※《北史・文苑傳序》「道軻軻而未遇、志鬱抑而不申。」（道は軻軻にして時に遇わず、志は鬱悒して伸びず。）※《古詩十九首・第四首》「無為守窮賤、軻軻長苦辛」（無為窮賤を守り、軻軻長へに苦辛する）の典拠がある。この二つの中国語は転義は同じであるが、本義は違っている。

また、中国語では「軻軻」と「坎珂」をはじめ、「軻軻」・「軻軻」・「軻軻」・「坎珂」・「坳珂」・「坳珂」・「坳珂」・「坳珂」・「坳珂」・「坳珂」・「坳珂」等、合計12語がある。すべての中国語は「不遇・志を得ない意」を有する。その中では、「軻軻」・「軻軻」・「軻軻」・「軻軻」の四つの語はほとんど差がないが、「軻軻」の用例が圧倒的に多い。「坎珂」・「坳珂」・「坳珂」・「坳珂」の四つの語もほとんど差がないが、「坎珂」の用例が圧倒的に多い。問題になるのは「土偏のカン+車偏のカ」がどういう語義を持っているかのである。漢字の構造から見れば、「土が平かでない意」と「車がゆきなやむ意」を有しないはずである。

以上の分析を基にして、日本語の「かんか」と中国語の「kanka」の語義は表二のようにまとめられる。

表二

漢語		語義	土が平かでない意	道が平かでない意	車がゆきなやむ意	不遇・志を得ない意
日本語	鞞	𠂔	/	/	○	○
		𠂔	/	/	△	○
	坎	𠂔	/	/	△	○
中国語	鞞	𠂔	/	○	○	○
			/	○	○	○
			/	○	○	○
			/	○	○	○
	坎	𠂔	○	○	/	○
			/	/	/	○
	培	𠂔	○	○	/	○
			/	/	/	○
	城	𠂔	○	○	/	○
			/	/	/	○
	墟	𠂔	○	○	/	○
/			/	/	○	

※ 語義の有無の記号：○ ある △ 未確定

漢語語義分類表を利用して、表三のように整理することができる。

表三

漢語		語義	土が平かでない意	道が平かでない意	車がゆきなやむ意	不遇・志を得ない意	種類
日本語	鞞	𠂔	/	/	○	○	B
		𠂔	/	/	△	○	C
	坎	𠂔	/	/	△	○	D
中国語	鞞	𠂔	/	○	○	○	
			坎	𠂔	○	○	○
		坎	𠂔	/	/	○	

即ち、日本語の「轆轤」は二つの語義を持っている。一つは車がゆきなやむ意である。もう一つは不遇・志を得ない意である。また、日本語の「坎坷」は「不遇・志を得ない意」という語義を持っているが、「車がゆきなやむ意」という語義を持っているかどうかは辞書によって、人によって違う意見があると思われるだろう。もう一つの「坎坷」は『ことばの泉』や『修訂 大日本國語辞典』などでは見られるが、日本語の用例はまだ発見できていない。ここでは、典拠がある漢語は勿論だが、典拠を明らかにし得ない「坎坷」は辞書の説明によって推論することもあるのを言っておく。

一方、中国語の「轆轤」は三つの語義を持っている。第一としては「道が平かでない意」である。第二としては「車がゆきなやむ意」である。最後は「不遇・志を得ない意」である。また、中国語の「坎坷」も三つの語義を持っている。第一としては「土が平かでない意」である。第二としては「道が平かでない意」である。第三としては「不遇・志を得ない意」である。日本語のように「車がゆきなやむ意」という語義を持っているかどうかの問題はないと思う。ただし、ここでは説明を加えたいのは「道が平かでない意」という語義の問題である。「道」と言うと、色々な道があるだろう。具体的に言えば、車が往来できる道と車が往来できない道が分けられると思う。細狭くて人しか通れない、平かでない道は「坎坷」を使って表現したほうが適当であると思われる。即ち、「車」という物が入れられない道は「坎坷」しか使えない。或いは、人が歩いている道を描写する時、「坎坷」のほうが相応しいと思う。また、抽象的に言えば下記の例のように

這一世紀の中國女子、心靈之路尤其坎坷。(この一世紀の中国の女子は心靈の路が尤も坎坷である。)

「心靈」に修飾されている道は「轆轤」を入れ換えたら、何だか違和感が感じられる。即ち、「車」という概念が入れない道は「坎坷」しか使えないと思う。

さて、鷗外は土が平かでない意を表す時には「坎坷」を用いた。また、「世に志を得ないこと。不遇、不遇。」という意を表す時には「轆轤」を取った。「坎坷」の用例は第一次岩波版『鷗外全集』全三十五巻では一回しか出てこなかった。その語義は日本語には取り入れない「土が平かでない意」だと考えられる。

また、「轆轤」の用例は全三十五巻の中で「舞姫」を含み、下記の三例を加えて四例になる。

1、【伊澤蘭軒】その二百二十二

わたくしは初め二世池田全安さんの手より此巻物を受けて披閱した時、京水の轆轤不遇の境界をおもひ遣つて、嗟嘆すること良久しかつた。(昭和十一年第一次岩波版『鷗外全集 著作篇』第七巻)

2、「外山正一氏の壘論を駁す」（「柵草紙」第八号〔明治23年5月25日発行〕に出て、「つき草」に収められた。）

皆て伯林に在りて、魯人某の新著小説を読みしに、一畫師ありて、其遇の轆轤を憤ほりて、常に沈鬱悲激の念を懷き、蒸汽機關室中の工夫が流汗面に被りたるさまを圖したることを記したり。（昭和十一年第一次岩波版『鷗外全集 著作篇』第十二巻）

3、「還東日乗」（明治二十一年七月十九日）

（前略）夜賦詩寄愕堂曰。轆轤憐君嘗苦辛。軒昂其志瘦其身。都門十載求知己。先數新橋第一人。（後略）（昭和十一年第一次岩波版『鷗外全集 著作篇』第二十巻）

それらの語義はすべて「不遇・志を得ない意」であると考えられる。

これは鷗外が中国語の意義を深く認識して、漢語の原意に即する用法に従ったものである。もし、『日本国語大辞典』の語釈に拠れば、

△表街の人道にてこそ沙をも蒔け、舗をも揮へ、クロス街のあたりは凸凹轆轤の處は見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。

の不適合な文に成り得る。「舞姫」では、鷗外が坎坷と轆轤をうまく使い分けたと考えられる。

以上の考察を通して、「舞姫」の「坎坷」の語義は第5類（C種類）、「轆轤」は第2類（B種類）に属するほうが適当であると思われる。

四 おわりに

日本人が漢語の意義について、どれぐらい中国語を理解して受容したか、どれぐらい新しい意味を付与したかは極めて困難な問題である。中国語を「鶴の丸呑み」のようにして総てを受け入れた訳はない。勿論、総てを切り壊して、語義という城を再建する必要もない。このような複雑多様な漢語の語義を確実に把握するのは両国の言語をうまく操る人しかできない。明治の文豪一森鷗外はその一人であったのだろう。本来の国語を重んじ、卓越な漢学的教養を持っている鷗外という窓を通して、日本の漢語の混沌たる状態を明晰に見通せるのではなからうか。

さて、鷗外は漢語の語義にどういう姿勢を取ったのかを「坎坷」（かんか）と轆轤（かんか）の二つの漢語を通して考えた。その上に、鷗外だけではなくて日本の漢語の語義を分類するために、「基本的」な漢語の語義分類表を作り上げた。これは実にとても大胆な試みであると思う。この分類表は完璧なものではないのを知りながら、漢語の語義を一語一語に分類するとき役に立つと考える。卓抜な漢学知識を持っている鷗外の漢語の「語義」を追求するのは単に辞書の上に頼ってばかりはいけぬ。語義を掴ん

だのは中国語と日本の漢語が、どれほどの異同があるかを究明しなければならないと思われる。

注

- 1 『国語学大辞典』国語学会編 平成5年7月 東京堂出版 頁184
- 2 石博中氏の修士論文を参考とした
- 3 『漢書下巻』1979 小竹武夫訳 筑摩書房 頁208により
- 4 南巢：殷の湯王が夏の桀王を放伐したところ
- 5 地名。壘は陝西・鄜の地、周の祖先公劉が領していた所。岐は陝西・岐山、周の大王のいた所
- 6 『中国古典文学大系41聊齋志異・下』1970 蒲松齡著 松田茂夫等訳 平凡社 頁453
- 7 陳樂融 作詞 1994歐陽菲菲の「烈火」音楽CD 台湾版「おしん」のテーマ曲

参考文献

- 一 山田孝雄 1958 『國語の中に於ける漢語の研究』訂正版 寶文館
- 二 佐藤喜代治 1971 『国語語彙の歴史的研究』明治書院
- 三 小島憲之 1984『ことばの重み——鷗外の謎を解く漢語』新潮選書
- 四 石博中 1998「母語（中国語）の語彙知識が第二言語（日本語）における語義の熟知性判断に及ぼす効果：日中同形語を用いた語彙判断課題に基づく検討」名古屋大学大学院人間情報学研究科 修士論文
- 五 張玉書 等撰『佩文韻府』1711（中国の韻書の集大成）
- 六 阮元 編刻『經籍纂詁』1798（中国の訓詁学の集大成）
- 七 許慎『説文解字』120（中国）
- 八 張玉書 等撰『康熙字典』1710（中国）
- 九 諸橋徹次 等著『廣漢和辭典』1982 大修館書店
- 十 『日本国語大辞典』第一版1972 小学館
- 十一 『漢語大詞典』羅竹風主編 第一版1990 漢語大詞典出版社（中国）
- 十二 『漢語大字典』徐中舒主編 第一版1986 四川辞書・湖北辞書出版社（中国）

(か きんたい 岡山大学文学研究科修士課程二年)